

菩提遷那の「如意輪菩薩像」再考

津田 徹英

はじめに

南天竺出身の僧・菩提遷那（七〇四～七六〇、挿図1）は婆羅門階級に生まれたというが、その法脈はもとより天竺・唐土での動静については明らかでない⁽¹⁾。開元二十二年（七三四）四月、唐朝謁見を果たした第十次遣唐使の正使・丹治比真人広成と学問僧理鏡は、かの地において菩提遷那に來朝の要請をおこなったようである。とすれば、菩提遷那は当時、長安において活動し、名声を挙げていたとみなされよう⁽²⁾。ただ

挿図1 菩提遷那（三国祖師影部分）鎌倉時代写
神奈川・龍華寺

し、彼らがどのようにして菩提遷那を知り接触に至ったのか、その経緯は定かでない⁽³⁾。要請に応じた菩提遷那は、同年十二月十三

日、帰国の途についた第十次遣唐使の第二船団（副使・中臣名代の乗る船団）に林邑僧仏哲、唐僧道璿らと共に乗船し、途次、風雨の難により第一船団より遅れて、天平八年（七三六）五月十八日に筑紫・大宰府に到着したという。八月八日には難波津に至り行基の出迎えを受け、同月二十三日には平城京にて聖武天皇に拝謁する⁽⁴⁾。詔勅により大安寺に僧坊を与えられ止住した。天平勝宝三年（七五二）には勅により僧正に補任。翌年に行われた東大寺毘盧遮那仏（大仏）完成供養に際して開眼師を勤めた。世に「婆羅門僧正」と呼ばれる。これらのあらましは後述の神護景雲四年（七七〇）四月二十一日に菩提遷那の入室弟子・修榮によって撰述をみた「南天竺婆羅門僧正碑并序（以下、碑并序）」に述べられるところである⁽⁵⁾。その「碑并序」には菩提遷那の造像に言及した箇所がある。それは、天平宝字四年（七六〇）、五十七歳を一期として臨終の砌、「阿弥陀浄土」の造立とともに、存命中に造顕を果たした「如意輪菩薩像」に「八大菩薩像」を造立付加することを弟子たちに遺言したと述べている。これ

らのうち、菩提遷那が生前に造立したという「如意輪菩薩像」については、その造立が何時頃のことであったのか、さらには、それが二臂であったのか、六臂であったかについても「碑并序」には触れられてはいない。しかしながら、ことに臂数の問題は、平城京における当代密教造像の動向を考えるうえで等閑視できないように考える。小論では先行研究に導かれつつ、「碑并序」の当該記事を読み直すことで、かの「如意輪菩薩像」が六臂・思惟形であったとの私見を示すとともに、密教造像史の観点から造願の意義に及ぼうとするものである。

一 中国における関係經典・儀軌の漢訳と密教黎明期（八世紀前半）の六臂造像の遺例

菩提遷那が造立した「如意輪菩薩像」が如意輪観音を意味することはいうまでもない。⁽⁸⁾その尊容（臂数）の問題を考えるためにも、如意輪観音の姿かたちと言及のある經典儀軌（以下、経軌）にはどのようなものがあり、それぞれの漢訳がいつ頃完了していたかについて、まず確認しておくことにする。

(1) 如意輪観音の姿かたちを説いた経軌の漢訳時期

『大正新脩大藏經』にもとづいて如意輪観音の姿かたちに言及のある経軌⁽⁹⁾を拾い上げ、そのなかに説かれる如意輪観音の呼称と臂数

〔表1〕 如意輪観音の姿かたちを説く経軌一覧

経軌の名称	如意輪の呼称	臂数
① 菩提流志訳『不空罽索神變真言經』卷九	如意輪觀世音菩薩	六臂
② 菩提流志訳『不空罽索神變真言經』卷十二	如意輪觀世音菩薩	六臂
③ 菩提流志訳『如意輪陀羅尼經』	如意輪聖觀自在菩薩	二臂
④ 宝思惟訳『觀世音菩薩如意摩尼輪陀羅尼念誦法』	聖如意輪菩薩	六臂
⑤ 金剛智訳『觀自在如意輪菩薩誦法要』	如意輪菩薩／真多菩薩	六臂
⑥ 不空訳『觀自在菩薩如意輪念誦儀軌』	如意輪菩薩	六臂
⑦ 不空訳『觀自在菩薩如意輪誦伽』	真多菩薩	六臂
⑧ 失訳『如意輪菩薩觀門義註秘訣』	如意輪菩薩	六臂

に及んで列挙してみると別掲（表1）の通りである。

①と②は変化観音群の一尊として像容に及んで述べられるものであり、③～⑧は如意輪観音を本尊とする経軌であった。それらのうち、①・②、④～⑧に説かれるところの如意輪観音の姿かたちはいずれも六臂であり、右の一手で頬を承ける思惟形を説く⁽¹⁰⁾。対して、③のみは二臂を説き、左手で如意宝珠を載せた開敷蓮華の柄を執り、右手は胸前で説法相（五指を開いて掌を正面に向けて立てる「説法印」）とする。⁽¹¹⁾

個々の訳出時期については必ずしも明確でないが、おおよその見通しは立つ。すなわち、開元十八年（七三〇）に智昇が編んだ仏典目録『開元釈教録』（以下、開元録）への登載の有無が、当時、既に漢訳が完了していたかどうかを判断する指針となろう。

すなわち、①と②は、『開元録』に見える「不空罽索神變真言經三十卷 大唐三藏菩提流志譯」⁽¹²⁾のなかに包摂されることは言うま

でもない。

その『開元録』には「如意輪陀羅尼經一卷 此經出大蓮花金剛三昧耶加持秘密無障礙經二十四紙 唐天竺

三藏菩提流志識」の記載が認められる。⁽¹³⁾ その訳出者と相まって割書にみえる「此經出大蓮花金剛三昧耶加持秘密無障礙經」の一文は、③の大正新脩大藏經本においても標題の下に割書で記されており、同経に比定できるであろう。⁽¹⁵⁾

④については、『開元録』はもとより、円照が勅を奉じて編纂し貞元十六年（八〇〇）に当代の皇帝徳宗に上進した仏典目録『貞元新定釋教目録（以下、貞元録）』にも、その名を見出すことはできない。また、正倉院文書に残る写経所における経卷の出納もしくは書写後における経卷の返却と書写経の検収記録においても、また、降って安然（八四一頃～九一五頃）撰述の『諸阿闍梨真言部類惣録（以下、八家秘録）』にも、その名は確認できない。ちなみに『大正新脩大藏經』所載のそれは東寺宝菩提院三密藏聖教の孤本によって活字翻刻がなされており、⁽¹⁶⁾ 長部和雄氏は、その成立を「不空時代以降、恵果以後、中・晩唐期の作であろう」と指摘する。⁽¹⁷⁾ 蓋し従うべき見解であろう。とすれば、宝思惟（生没年不詳、活動は八世紀初頭とみられる）に訳者を仮託していたことになる。

⑤は、『開元録』に「観自在如意輪菩薩瑜伽法要一卷 大唐三藏金剛智訳」とあるものに比定できる。⁽¹⁸⁾ 『開元録』の別の個所には、その文字量を「九紙」と明記する。⁽¹⁹⁾ 加えて『開元録』に収める金剛智（六七一～七四二）略伝には「至十八年庚午。於大薦福寺、出曼殊室利五字心及観自在瑜伽要」とあり、開元十八年（七三〇）に

『曼殊室利五字心』とともに『観自在瑜伽要』の訳出が長安の大薦福寺においてなされたことを伝える。⁽²⁰⁾ 両儀軌は、この金剛智略伝の直前に記された「金剛頂経曼殊室利菩薩五字心陀羅尼品一卷」と「観自在如意輪菩薩瑜伽法要一卷」を指すであろうことは、⁽²¹⁾ 『貞元録』において両儀軌の登載に際していずれも「開元十八年於大薦福寺訳」を明記するところからも領けよう。⁽²²⁾ とすれば訳出直後に『開元録』への登載をみたことになる。

不空（七〇五～七七四）による漢訳という⑥と⑦は『開元録』に記載を見出すことができない。ただし、⑥について、長部和雄氏の研究に従えば、⁽²³⁾ 『開元録』にみえる「如意輪念誦儀・一卷 八紙（傍点論者、以下同）」⁽²⁴⁾ がこれに相当するという。この「如意輪念誦儀」は、不空の弟子であった円照（七一九～八〇〇）がまとめた『代宗朝贈司空大辯正廣智三藏和上表制集（以下、不空表制）』巻三に収める「三朝所翻經請入目錄」、それは開元二年（七一四）より不空晩年の大暦六年（七七二）に至るまでに「總七十七部凡一百一卷」に及んだ訳経について、同（大暦六）年十月十二日付で不空自ら上表した目錄であるが、そのなかに記載がみえる「如意輪念誦法」に当たろうか。⁽²⁵⁾ 降って貞元十一年（七九五）に円照が編んだ『大唐貞元續開元釋教録』巻下 入藏 録 には「如意輪念誦法 經内云観自在如意輪菩薩念誦法」⁽²⁶⁾ とあり、「如意輪念誦法」の内題が「観自在如意輪菩薩念誦法」であったことが知られよう。また、元和二年（八〇七）に慧琳が著した一切経に出てくる難解語彙や漢音表記された梵語などの意味や発音を記した『一切経音義（慧琳音義）』巻四〇には似寄りの標

題をもつ「観自在如意輪菩薩念誦儀軌・不空訳」からの難読・難解語彙が挙げられており、⁽²⁷⁾それらの語彙は⑥のなかに認めることができそうである。⁽²⁸⁾これらのことを勘案するならば「如意輪念誦儀」が⑥の不空訳「観自在菩薩如意輪念誦儀軌」に相当するとした長部氏の推定を補強するであろう。

⑦については、上述の『不空表制』に収められた訳経目録のなかに言及はないが、貞元十六年（八〇〇）に成立した『貞元録』には「観自在菩薩如意輪瑜伽一卷 九紙」^{貞元新大興善寺藏沙門大廣智不空奉詔訳}とみえる。⁽²⁹⁾遡って貞元十一年（七九五）の『大唐貞元續開元釋教録』巻上にも「観自在菩薩如意輪瑜伽一卷 九紙」とある。その名称と料紙の枚数が一致するところから、不空訳出のそれとみてよさそうである。⁽³⁰⁾とすればその訳出についてはひとまずそれへの登載以前、具体的には大暦六年（七七二）の「三朝所翻経請入目録」の上表以降、不空最晩年（七七四年没）の間であったと考えるのが穏当であろう。⁽³¹⁾

⑧については『開元録』、『貞元録』に見えないが、空海が唐土において書写して日本に伝えた『三十帖策子』第二十七に収載が確認できる。⁽³²⁾遅くとも空海が入唐を果たした貞元二〇年（八〇四）以前にかの地で成立していたことになる。

かくして、表1に列挙した八件のうち、①②③⑤⑥は、開元十八年（七三〇）に編まれた『開元録』への登載が確認でき、それ以前に漢訳が完了していたことになる。

(2) 唐・長安における六臂・思惟形の如意輪観音像の遺例

——西安・碑林博物館蔵大智禪師碑に刻出された如意輪観音——

如意輪観音の姿かたちを説いた経軌類それぞれの漢訳がなされた時期について、それらの概要を押さえたうえで、八世紀の中国、ことに帝都長安における六臂・思惟形の如意輪観音の造像遺例に眼を向けておくことにしたい。ここで予め一言しておかなければならないのは、石田尚豊氏の高著『曼荼羅の研究』のなかで現図胎蔵曼荼羅の成立にあたって「如意輪菩薩はすでに、不空罽索経巻九、巻十二の二箇所にわたってこの六臂像が説かれ、その持物もことごとく符号する。同じ不空罽索経を所依經典とする胎蔵図像に、なぜこのような古像が導入されなかったか不思議である」と疑問を呈しながらも、⁽³³⁾「如意輪観音像は、不空罽索経の中にあつて外郭的な存在であつたことは確かで（中略）当時この六臂像は異質的な新像として内郭の観音部からしりぞけられていたのであろう。現図と関係の深い撰無礙経にもこの尊の記載がみられ現図になるとさらに多くの多臂像が導入されることになり、如意輪もまた抵抗なく現図のなかに摂取されていったのであろう」と⁽³⁴⁾解されたことにある。この一文に重きを置くと、如意輪観音の造頭は胎蔵図像、胎蔵旧図像を踏まえて現図胎蔵曼荼羅へと再編をなし得た恵果（七四六―八〇五）の活動期である八世紀第四四半世紀以降において漸く受容がなされたのではないかという認識に誘導されてしまうことになるであろう。しかしながら、六臂・思惟形、輪王坐という今日我々が知る姿かたちと全く変わらない如意輪観音像が八世紀前半に遡って帝都長安

において顕現をみていた事実は等閑視する訳にはゆかない。それは開元二十四年（七三六）に造立をみた大智禪師碑のなかに高肉彫りで刻出されている。

かの大智禪師とは、唐代中期の高僧・義福のことである。「大智禪師」の称は皇帝玄宗から贈られた諡号である。碑（高三四五cm、巾一一四cm）は禪師が没した開元二十四年に行実を顕彰すべく建立がなされたことを碑文が伝えている。碑は原碑そのものであり、陝西省西安市の碑林博物館に常時公開されている。碑文は宮廷の中書侍郎・嚴挺之の撰になり、書字は唐隸四大家のひとり史惟則の隸書である。⁽³⁵⁾この隸書は名筆として非常によく知られており、原碑から多くの拓本が採られて中国はもとより日本において珍重されてきた

挿図2 大智禪師碑 拓本(部分)
東京国立博物館蔵

〔挿図2〕。ただし、拓本は刻銘をいかに鮮明に写し取るかというところに腐心がなされており、碑の上部（碑首）にまで及んで拓本が採られることはなかったようである。碑首には双龍があらわされており（竈首）、その先端（頂）に如意輪観音像があらわれている〔挿図3〕。大智禪師碑の造立年がそのまま如意輪観音像の造顕年となる。すなわち、開元二十四年（七三六）のことであった。

その如意輪観音像の像容を確認しておく以下の通りである。像は靈芝雲を重ねた湧出雲を伴った仰蓮上に円相（外周に沿うように内側に刻線一条をとまなう）を設け、この円相のうちに尊容を収める。現状、頭部の大半と各手首先を欠失するが、条帛を左肩から右脇腹に懸け、裙を纏い、胸飾（珠繋ぎ）・臂釧（平紐二条）・腕

挿図3－(1) 大智禪師碑(竈首) 開元24年(736)
中国・陝西省碑林博物館蔵

挿図3－(2) 同(竈首 頂部)

釧（平紐一条）を各々着け、右脚を屈して立膝とし、左脚を屈し横たえた輪王坐にあらわされている。頭部をいささか右に傾け、臂数は六臂となる。各手の手勢は以下の通り。

右上段の腕は屈して腋を大きく開いて肘先を外側に突き出し、手首の位置と方向から判断して、その手先は傾けた頭部の右頬を承けて思惟の相をあらわしていたとみなされよう。中段の腕は屈臂して胸前で構え、下段の腕は立膝とする右脚の外側に垂下して数珠（残存）を執る。

左上段の腕は体側において屈臂して立て、中段の腕は脇腹前で長く伸びた開敷蓮華（残存）の枝先を執る。下段の腕は垂下して手先を伏掌して地に着けたと思われるが、現状、肘から先を欠失する。

その手勢と体勢から判断して六臂・思惟形、輪王坐の如意輪観音像とみて大過ない。ここで六臂・思惟形の如意輪観音を説く表1に掲げた①②⑤⑥の各経軌が開元十八年（七三〇）の『開元録』に登載をみていたことを思えば、その登載からさほど時を隔てない開元二十四年（七三六）の帝都長安において六臂・思惟形、輪王坐の如意輪観音像が顕現していた事実はことのほか重い。

この大智禪師碑の碑首（螭首）の頂に六臂・思惟形の如意輪観音像があらわされた理由について碑文には言及がなく明確でない。ただし、史料としていささか時代の降る点に難はあるものの、北宋・端拱元年（九八八）に賛寧が皇帝太宗の勅を承けて撰述した『宋高僧伝』第一に収める「唐洛陽廣福寺金剛智伝」には「大智大慧二禪師、不空三蔵、皆行弟子之礼焉」とあり、大智禪師（義福）が大慧

禪師（一行）、不空三蔵とともに金剛智に対して弟子の礼をとつたと伝えることは見過ごせない。というのも、かの金剛智こそは、六臂・思惟形の如意輪観音の姿かたちと言及した『観自在如意輪菩薩瑜伽法要』（表1の⑤）の漢訳を開元十八年には了えていたからである。大智禪師の顕彰碑に六臂・思惟形の如意輪観音像をあらわし得た意図も、禪師が師と仰いだ金剛智の訳出になる『観自在如意輪菩薩瑜伽法要』の内容に求め得るように考えるが、そのことについては後述することにして、ここでは六臂・思惟形、輪王坐の如意輪観音像の帝都長安における受容とその顕現が大智禪師碑の存在から、建立のなった開元二十四年（七三六）にまで遡ることが確認できれば十分である。

二 菩提遷那の「如意輪菩薩像」の造立をめ ぐって

前節で中国において二臂とともに六臂・思惟形の如意輪観音の姿かたちを説く経軌の多くが開元十八年（八三〇）迄には漢訳を完了しており、かつ、その所説を反映したとみられる六臂・思惟形の如意輪観音像が直後の帝都長安において顕現していた事実を確認した。そのことを踏まえたうえで、次にこれらの関係経軌の日本における受容に眼を向けつつ、菩提遷那の発願造立した「如意輪観音像」がはたして二臂であったのか、六臂・思惟形であったのか、そのいずれとみなし得るのかについて私見を述べてみたい。

(1) 関係経軌の日本における受容

正倉院文書が伝える写経所における経巻の出納と、書写後における經典の返却と書写経の検収の記録のなかから如意輪観音の姿かたちを説く経軌を拾い集めてみるとき(表2)、『不空羂索神変真言経』、『如意輪陀羅尼経』、『観自在如意輪菩薩瑜伽法要』、『観自在(もしくは観世音)菩薩如意輪瑜伽法要』の存在が浮かびあがる。それらの記録上の初出に留意してみると、『観自在如意輪菩薩瑜伽法要』が最も古く、天平八年(七三六)に遡るとともに、翌年には『如意輪陀羅尼経』の名も確認できる。ここで想起されるのは、菩提遷那が第十次遣唐使の第二船団に乗船して来日した前年の天平七年(七三五)、第一船団で帰国した玄昉が、一切経五千余巻を持ち帰っていた事実にある。⁽³⁷⁾玄昉は、かの地での五千余巻に及んだ一切経の収集に際し、『開元録』巻十九と巻二十に収録をみた西崇福寺の一切経目録にもとづいて収集を行っていたことが明らかになっている。⁽³⁸⁾確かに『開元録』十九巻のうちに上述の『不空羂索神変真言経』、『如意輪陀羅尼経』、『観自在如意輪菩薩瑜伽法要』の登載が確認できる。⁽³⁹⁾

なお、表2に示したように正倉院文書に残された記録のなかに『観自在如意輪菩薩瑜伽法要』と似寄りの名称をもつ『観自在(もしくは観世音)菩薩如意輪瑜伽法要』の存在が三件確認できる。ただし、それらを不空訳『観自在菩薩如意輪瑜伽』(表1の⑦)に比定することは早計であろう。先に指摘したように不空によるその訳出は、大暦六年(七七二)以降、不空が没した同九年(七七四)ま

での最晩年であったとみなされる。上述三件のうち、(1)の天平十一年(七三九)のそれは、想定される不空の訳出年を遙かに遡るものであり、(2)の宝龜二年(七七二)と(3)の宝龜三年のそれらについても不空による漢訳の時期と接しており微妙である。仮に訳出が最も遡る大暦六年に成ったとしても、訳出直後に日本にもたらされ、ただちに書写の対象となったとみることは躊躇する。やはりいずれも金剛智訳『観自在如意輪菩薩瑜伽法要』のことであったと解した方が適切と考える。加えて、同じく不空訳になる『観自在菩薩如意輪念誦儀軌』(表1の⑥)について、それは『開元録』登載の「如意輪念誦法」のこととみなしたが、正倉院文書の記録には、いずれの名をもつてしてもこれを見出し難い。とすれば、その請来は『八家秘録』に示されるように大同元年(八〇六)の空海帰国を俟つてのこととみた方が穏当であろう。⁽⁴⁰⁾

このようにみると、如意輪観音の姿かたちに言及がある経軌のうち、奈良時代における受容が確認できたのは、『不空羂索神変真言経』、『如意輪陀羅尼経』、『観自在如意輪菩薩瑜伽法要』(表1の①②③⑤に相当)に限定されるとき、それぞれの写経所における經典の出納もしくは検収記録にあらわれた頻度について、天平年間にあつては『如意輪陀羅尼経』がその主流たり得たが、天平勝宝初年以降にあつては三つの経軌の間において、さほど大きな差がなかったことも留意すべきと思われる(後述)。

〔表2〕 正倉院文書に残る如意輪観音の姿かたちを説く経軌の出納・検収記録

経軌の名称	出納もしくは書写後の検収日	巻数	枚数	巻	頁	備考
不空羅索神変真言経	1 天平勝宝 4 年 (752) 正月 25 日類収	30 巻	— 紙	12	206	※ 1 ※ 1
	2 天平勝宝 4 年 (752) 正月 25 日類収	30 巻	— 紙	12	211	
	3 天平勝宝 5 年 (753) 2 月	30 巻	— 紙	25	60	
	4 天平勝宝 5 年 (753) 2 月 11 日	30 巻	— 紙	12	413	
	5 天平勝宝 5 年 (753) 2 月 11 日附収	30 巻	— 紙	12	414	
	6 天平勝宝 5 年 (753) 5 月 7 日類収	30 巻	— 紙	12	552	
	7 宝亀 2 年 (771) 4 月 8 日	9 巻分	296 紙	18	430	
	8 宝亀 2 年 (771) 4 月 8 日	9 巻分	181 紙	18	431	
	9 宝亀 2 年 (771) 4 月 17 日	巻 9	25 紙	18	373	
	10 宝亀 2 年 (771) 5 月 13 日	巻 9	25 紙	18	280	
	11 宝亀 2 年 (771) 6 月 1 日	巻 9	25 紙	18	265	
	12 宝亀 3 年 (772) 9 月 13 日	9 巻分	173 紙	20	148	
	13 宝亀 3 年 (772) 類収	28 巻	— 紙	21	27	
	14 宝亀 3 年 (772) 類収	28 巻	— 紙	21	90	
	15 宝亀 5 年 (774) 10 月 17 日類収	30 巻	600 紙	23	167	
	16 宝亀 6 年 (775) 12 月 20 日	巻 9	26 紙	23	528	
	17 宝亀 7 年 (776) 正月 21 日	巻 9	26 紙	23	451	
如意輪陀羅尼経 ※ 2	1 天平 9 年 (737) 3 月 24 日	1 巻	— 紙	7	74	
	2 天平 10 年 (738) 9 月 6 日	1 巻	— 紙	7	189	
	3 天平 15 年 (742) 3 月 14 日	1 巻	— 紙	24	178	
	4 天平 15 年 (743) 7 月 22 日	1 巻	— 紙	8	221	
	5 天平 17 年 (745) 7 月 11 日	1 巻	— 紙	24	173	
	6 天平 18 年 (746) 9 月 11 日	1 巻	26 紙	24	348	
	7 天平勝宝 3 年 (751) 9 月 20 日類収	1 巻	26 紙	12	77	
	8 天平勝宝 3 年 (751) 9 月 20 日類収	1 巻	27 紙	12	115	
	9 天平勝宝 5 年 (753) 6 月 4 日	1 巻	— 巻	12	391	
	10 天平勝宝 5 年 (753) 6 月 4 日	1 巻	— 紙	4	94	
	11 天平勝宝 7 年 (755) 2 月 9 日	1 巻	— 紙	13	129	
	12 天平勝宝 7 年 (755) 8 月 17 日	1 巻	— 紙	13	152	
	13 天平勝宝 7 年 (755) 8 月 21 日	1 巻	— 紙	13	154	
	14 天平神護 3 年 (767) 2 月 8 日	1 巻	— 紙	17	30	
	15 宝亀 3 年 (772) 類収	1 巻	29 紙	21	90	
	16 宝亀 5 年 (774) 10 月 17 日	— 巻	25 紙	22	434	
観自在如意輪菩薩瑜伽法要	1 天平 8 年 (736) 4 月 29 日	1 巻	— 紙	7	82	※ 3
	2 天平 10 年 (738) 9 月 23 日	1 巻	9 紙	7	191	
	3 天平勝宝 3 年 (751) 9 月 20 日類収	1 巻	10 紙	12	90	
	4 天平勝宝 3 年 (751) 8 月 16 日	1 巻	11 紙	12	128	
	5 天平勝宝 5 年 (753) 2 月 11 日	1 巻	11 紙	12	412	
	6 天平勝宝 5 年 (753) 5 月 7 日類収	1 巻	— 紙	12	495	
	7 天平勝宝 7 年 (755) 2 月 9 日	1 巻	— 紙	13	131	
	8 天平勝宝 7 年 (755) 8 月 17 日	1 巻	— 紙	13	153	
	9 天平勝宝 7 年 (755) 7 月附収	— 巻	— 巻	13	202	
	10 天平神護 3 年 (767) 2 月 8 日	1 巻	— 紙	17	33	
	11 宝亀 3 年 (772) 10 月 4 日	1 巻	10 紙	20	136	
	12 宝亀 3 年 (772) 9 月 22 日	1 巻	10 紙	21	40	
	13 宝亀 3 年 (772) 類収	1 巻	10 紙	21	103	
	14 宝亀 5 年 (774) 10 月 17 日類収	1 巻	— 紙	23	146	
観自在菩薩如意輪瑜伽法要	1 天平 11 年 (739) 9 月 15 日	1 巻	10 紙	7	325	※ 4
	2 宝亀 2 年 (771) 3 月 27 日	1 巻	10 紙	18	248	
	3 宝亀 3 年 (772) 3 月 11 日	1 巻	3 紙	19	352	

※ 1 表記は「不空羅索真言神変経」となり、巻数も 28 巻と表記されているが、この項目に収めた。

※ 2 この「如意輪陀羅尼経」の項目には、単に「如意輪陀羅尼」と表記される経巻については採択していない。

※ 3 表記は「観自在如意輪菩薩」となり以下の文字を欠くが、この項目に収めた。

※ 4 表記は「観世音菩薩如意輪瑜伽法要」と表記するが、この項目に収めた。

(2) 「如意輪菩薩像」の造立

ここに至つて小論が問題とする菩提遷那の「如意輪菩薩」の造像に眼を向けてみることにする。そのことに言及のある「碑并序」の文末には菩提遷那の弟子であつた修榮によつて神護景雲四年（七七〇）に撰述した旨の識語⁽⁴³⁾がともなう。原碑は失われており、本文の中世に遡る写本も知られていない。かろうじて近世の版本と群書類従本によつて碑文が伝えられており、近代に入つてそれらをもとにくつかの活字翻刻がなされている⁽⁴⁴⁾。この「碑并序」については、藏中のぶ氏が現存諸本をもつて校訂し詳細な語註と解説を行つており⁽⁴⁵⁾、あわせて氏の研究により碑文の文章構築にあつて『梁高僧伝』ほかを参照していることが指摘されている。ただし、そのなかにあつて菩提遷那の発願・造像にかかわる文章については、規範となつた先規文例が見出し難いことも明らかにされている⁽⁴⁶⁾。とすれば、その造像はもとよりそのことを述べた文章についても菩提遷那独自の造像観を反映した文章ということにならう。ここで「碑并序」の当該部を掲げてみると以下の通りである⁽⁴⁷⁾。

春秋五十七。臨終^ニ告^ニ諸ノ弟子^ニ云^{ハク}、吾常^ニ觀^ニ清性^一、直^ニ嚴^{シク}自性身^一、而^{シテ}猶^ホ尊重^シ弥陀^一、景仰^ス觀音^一、汝曹、宣^ニ抽^キ吾^カ帑藏^ノ衣物^ヲ奉^レ造^リ阿弥陀^ノ浄土^上。又云^{ハク}、吾生存之日、普^ク為^ニ四恩^一、奉^ル造^リ如意輪菩薩^ノ像^ヲ、而^{シテ}情^下願^フ更^ニ造^リ八大菩薩^ノ像^ヲ、列^ニ坐^{セシメ}其^ノ像^上、而^ル無^レ常行^キ迫^リテ、其^ノ事不^レ諧^ハ、汝曹、不^レ忘^ニ疇昔^一、宜^ニ共^ニ相^ヒ助^ケ畢^ハ功^ヲ。

菩提遷那の「如意輪菩薩像」再考

弟子等奉^レ遵^シ遺旨^一、備^ニ飾^リタリ八像^ヲ。

（返り点、送り仮名等論者）

すなわち、齡五十七を一期として、菩提遷那は末期に臨んで弟子たちに自らの来し方のありように触れるとともに、その信仰について「弥陀を尊重し、觀音を景仰す」と述べる。文飾⁽⁴⁸⁾のうちにも阿弥陀と觀音の信仰を持っていたことが示されている。併せて弟子たちには「阿弥陀浄土」の造立とともに、「普く四恩の為に」造像した「如意輪菩薩像」に、生前ついに果たすことができなかった「八大菩薩像」の造立と、それらを「如意輪菩薩像」に「列坐」させることを要請し、菩提遷那の入滅後、遺言に従い弟子たちは「八大菩薩像」を造立し、「如意輪菩薩像」に併置させたという。かの菩提遷那は来日に際して聖武天皇の詔勅により、大安寺に止住するとともに、弟子たちの育成に及んだようであることを思えば、「如意輪菩薩像」の造立安置は大安寺内においてとみるのが自然であり、その時期もひとまず詔勅により大安寺に止住することになった天平八年（七三六）八月末以降、入滅を迎えた天平宝字四年（七六〇）二月二十五日以前ということになる。

さて、菩提遷那が生前に造立をみたという「如意輪觀音像」について、六臂像の可能性に言及したのは井上一稔氏であつた⁽⁴⁹⁾、一方、二臂と解する見解に、古くは元禄九年（一六九六）に「碑并序」に註解を付した南都の僧性空⁽⁴⁸⁾がおり、近年では谷口耕生氏が改めてその可能性を提示されるに至っている⁽⁴⁹⁾。前者と解し得るならば、その

姿かたちは、九世紀以降の観心寺彩色像（金堂本尊）や醍醐寺金色像（上醍醐清瀧宮伝来）に先駆ける「新密教」の造像という意義をそこに付与することができる。後者とみるならば龍蓋寺（岡寺）像、東大寺大仏殿左脇侍像、石山寺像などの南都における二臂の如意輪とされる観音信仰の伝統に連なる「古密教」の造像ということになるであろう。⁽⁵¹⁾ 先に眺めたように正倉院文書にあらわれた写経所における經典の出納と書写後の經典返却と書写経の検収記録に拠ってみると、六臂・思惟形を説く関係經典（表1の①、②、⑤に相当）と、二臂を説いた經典（③）の受容には、さほど大きな差があった訳でなく、「如意輪菩薩像」の造立が、そのいずれであったとみるべきかは俄かに決し難い。しかしながら、当該の造像を述べた文の冒頭において菩提遷那は、その信仰が「弥陀を尊重し、観音を景仰するものであったと自ら語っていることは見過ごすべきではない。すなわち「阿弥陀浄土」と「如意輪菩薩像」に伴う「八大菩薩像」の造立について、これらを一連の構想のもとで行われたと捉えるならば、「如意輪菩薩像」の姿かたちを明らかにする新たな解釈の地平が拓けるように考えるのである。

ここでまず留意すべきは、「碑并序」の上掲の文章の直前には「僧正、諷誦^{シテ}華嚴經^ヲ、以^テ為^シ必要^ト、尤^モ善^ク呪術^ヲ、弟子承習^{シテ}、至^ル今^ニ伝^フ之^ヲ」と記すことにある。菩提遷那の信仰の基盤に華嚴經があつたとみるべきであろう。とすれば菩提遷那が自ら「弥陀を尊重し、観音を景仰す」と述べて、そこに観音と対になる勢至への言及がないことに関して、仏駄跋陀羅訳の『大方広仏華嚴經

（旧訳、六十華嚴）』に「或見阿弥陀、観世音菩薩、灌頂授記者、充滿諸法界」とあることや、あるいは、実叉難陀訳の『大方広仏華嚴經（新訳、八十華嚴）』の「或有見仏無量壽、観自在等圍繞、悉已住於灌頂地、充滿十方諸世界」とあることの反映があつたように考えるのである。⁽⁵²⁾ もとより両『華嚴經』は、貞元十一年（七九五）から同十四年になつた般若訳の『大方広仏華嚴經入不思議解脱境界普賢行願品（四十華嚴）』のように明確に「拔済衆生」と「阿弥陀仏極樂世界」への往生を説くことはなく、やはり阿弥陀・観音信仰の具体相については別の經典に子細を求めたとするのが自然であろう。⁽⁵³⁾ 菩提遷那が弟子に造立を要請した「阿弥陀浄土」の具体相がどのようなであつたかは情報量が少ないため詳細は不明であるが、自らの臨終に際しての弟子たちへの要請であつたことを思えば、それは阿弥陀如来の西方極樂浄土世界への「往生」とそれへの「欣求」からの発露であつたことは想像に難くない。そのことを重視するとき一顧すべきは、金剛智訳『観自在如意輪菩薩瑜伽法要』において、六臂・思惟形の姿かたちを説いた直後に「六臂広博體、能遊於六道、以大悲方便、斷諸有情苦⁽⁵⁴⁾」と述べることにある。それは如意輪観音の六臂（六手）それぞれに「大悲方便」を以つて六道（天・人・修羅・餓鬼・畜生・地獄）に迷う「諸（もろもろ）の有情（衆生）」の救済を説くものであり、その発想は、「阿弥陀浄土」への往生と不可分にあつた一切衆生の六道救済に他ならない。上述の偈文に「大悲の方便を以つて諸（もろもろ）の有情（衆生）の苦を斷たん」とあることは、まさしく「如意輪菩薩像」の造立にあたつ

て「普く四恩の為」と述べることも無関係ではない。この「四恩」の解釈については意外に難解であるが、当該句が開元十八年（七三〇）に智昇より撰集された『集諸経礼懺儀』巻上に見える「普為四恩三有法界衆生」を踏まえることは見過ごすべきではない。⁽⁵⁹⁾『集諸経礼懺儀』は同年に智昇自ら編纂した『開元録』に登載しており、また、正倉院文書にあらわれた写経所の記録から、奈良時代にはその存在が知られていたことが確認できる。⁽⁶¹⁾この『集諸経礼懺儀』の当該字句を踏まえるならば「普為四恩」の意味するところも一切衆生のためという意味内容を容易に導くことができるであろう。この一切衆生のうちに西方阿弥陀極楽浄土世界への往生を欣求する菩提遷那も包摂されていたことはいままでもない。

かくして、奈良時代に受容をみた六臂・思惟形の如意輪観音を説く関係経軌（表1の①、②、⑤に相当）のうち、一切衆生の六道救済を明確に打ち出したものは、金剛智訳の『観自在如意輪菩薩瑜伽法要』において他にはなく、ここに造頭をみた如意輪観音の姿かたちは、この『観自在如意輪菩薩瑜伽法要』にもとづく六臂・思惟形での造像であったと考えるのである。「碑并序」において如意輪観音の呼称を「如意輪菩薩」と表記したことも、関係経軌（表1参照）のうち、上述のごとく依拠した経軌として浮上した金剛智訳が「如意輪菩薩」と表記していたことも偶然ではないであろう。

(3) 「八大菩薩像」の造立

ところで、「碑并序」の記述にしたがえば、菩提遷那は自らが造

立した「如意輪菩薩像」に「八大菩薩像」を造立併置させることを遺言し、その没後、それら八軀の造像は弟子たちの合力で実現したという。この「八大菩薩像」について、性空の『碑註』以来、菩提流志訳『如意輪陀羅尼經』の「壇法品第五」に説かれるところの、⁽⁶²⁾「円満意願明王」「白衣觀世音母菩薩」「大勢至菩薩」「多羅菩薩」「馬頭觀世音明王」「一髻羅刹女」「四面觀世音明王」「毘俱胝菩薩」であったと解されてきた。⁽⁶³⁾しかし、前節で明らかにしたように菩提遷那が造立した「如意輪菩薩像」は金剛智訳の『観自在如意輪菩薩瑜伽法要』にもとづく六臂・思惟形であったとみなしたところから、『如意輪陀羅尼經』に説くところの二臂の「如意輪聖觀自在菩薩」に伴する八尊（上述）の造頭とみることに躊躇する。かの「如意輪菩薩」が六臂・思惟形という「新密教」の経軌にもとづくものであり、平安時代以降にあつては密教の主要尊格の一つとして受容されてゆくことを思えば、その四隅に内・外四摂の菩薩の類の安置を想定することも一案かもしれない。しかしながら八世紀後半において、既にそのような発想があり得たかどうかは定かでなく、確証も得られない。むしろ論者は文字通り「八大菩薩」が安置された可能性を探ってみたいのである。

この「八大菩薩」を説く經典にはいくつかの系統があつたことが知られる。⁽⁶⁴⁾そのなかで注目したいのは、『出生無辺門陀羅尼經』をはじめとして、『無量門微密持經』『出世無量門持經』『無量門破魔陀羅尼經』『阿難陀目佉尼呵離陀經』『阿難陀目佉尼呵離陀隣尼經』『舍利弗陀羅尼經』『一向出生菩薩經』に説かれるところの「八大菩薩」

の存在にある⁽⁶⁵⁾。これらの經典の名は、いずれも正倉院文書にあらわれた写経所における経巻の出納もしくは書写後の経巻の返却と書写経の検収記録において確認でき、その多くが天平八年（七三六）以降、それなりの頻度をともなうてあらわれていたことも留意したい（表3）。それらの内容は分量的にみて広略があるものの、いずれも釈尊が毘舍離（もしくは維舍梨、惟舍梨、維耶離、毘耶離）城の大林（大梨、大叢）精舎において比丘衆に陀羅尼法を説くという体裁をとり、その法座に居合わせた法師のひとりが阿弥陀如来を前生とする、もしくはその化現であつたと述べるとともに、そこに説かれる「八大菩薩」については、欲界天にあつて行者を守護するといふ。ここでそれらの記述を『出世無辺門陀羅尼經』に拠つて眺めてみると、「何^ヲ以^テ故^ニ其^ノ無量寿如来^ハ、彼^ノ時^ニ為^リタルヤ^ニ不思議功德宝吉祥法師^ト（中略）無辺^ノ光明^ハ於^テ前生^ニ、仏無量寿^ヲ為^リ法師^トと述べられており、あわせてそこに説かれる「八大菩薩」の役割については「生^レテ^ニ欲界天^ニ、彼等^ハ亦^タ来^{タリ}テ加持^{セリ}摂受^ス」と説く⁽⁶⁷⁾。ここで行うところの「欲界天」とは六道のうち地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間までの欲望に捉われた世界を指し、八大菩薩は、この「欲界天」に現じ、（そこで迷うすべての輩を）加持・摂受する（意識）という点において、まさしく「普く四恩の為に」に造立された六道救済を行う六臂・思惟形の「如意輪菩薩」と一具をなした理由もそこに求め得るように考えるのである。かつ、当該諸経のいずれにおいても、そこで述べられる阿弥陀の前生もしくは化現譚が「阿弥陀浄土」の教主と直接関わることはいうまでもない。ちなみに、この

『出生無辺門陀羅尼經』を承けた供養法を偈文で説く『出生無辺門陀羅尼儀軌』では、八大菩薩の具体的な尊名に言及がないものの、「復有八菩薩、安住於八方」と説いている⁽⁶⁸⁾。上述の『出生無辺門陀羅尼經』において八大菩薩の役割に言及した当該句の直前に「諸門有八大菩薩」と述べられていることをあわせて念頭に置くならば、「如意輪菩薩像」の八方に各菩薩が配置されていたという解釈を導きだすことも不可能ではない。しかしながら『出生無辺門陀羅尼儀軌』は、『開元録』、『貞元録』はもとより、正倉院文書にあらわれた写経所の出納・検収の記録のなかにもその名があらわれることはない。『出生無辺門陀羅尼儀軌』の日本への請来と受容は大同元年（八〇六）に空海が帰国した際に持ち帰つて以降とみたほうがよさそうであり、ゆえに八方に「八大菩薩」を布置した可能性についても慎重にならざるを得ない。

そうと考えるとき、一つの可能性としてここに提示してみたいのは、『大日經』（正しくは大毘盧遮那成仏神変加持經）に説かれるところの「八菩薩」の布置法である。この『大日經』における当該句はごく短く「捨於二分位、當畫八菩薩者」と述べるにすぎない。しかしながら、『大日經』の注釈書としての役割を担う『大日經疏』（以下、疏）には、この文言について次のように解説している⁽⁶⁹⁾。

經云ハク捨於二分位、當畫八菩薩者（中略）然^{シテ}後^ニ如^ニ其^ノ次第^ニ置^ケ八菩薩^ヲ、凡^ソ列^ルニハ諸^ノ眷属^ヲ、皆令^ニ最初^ノ者^ヲシテ在^レ右^ニ、第二^ノ者^ヲ在^レ左^ニ、第三^ヲ復^タ在^レ右^ニ、第四^ヲ復^タ在^レ左^ニ

〔表3〕 正倉院文書に残る「八大菩薩」に言及のある諸経の出納・検収記録

経典名称	出納もしくは書写後の検収日	巻数	枚数	巻	頁	備考
出生無辺門陀羅尼經	天平勝宝4年(752)1月25日(類収)	1巻	— 紙	12	207	
	天平勝宝4年(752)1月25日(類収)	1巻	— 紙	12	212	
	天平勝宝5年(753)5月7日(類収)	1巻	2紙	12	552	
	宝亀5年(774)10月17日	1巻	— 紙	23	146	
無量門微密持經	天平8年(736)11月24日	1巻	— 紙	7	60	
	天平16年(744)2月2日	1巻	— 紙	24	172	
	天平勝宝3年(751)9月20日(類収)	1巻	6紙	12	78	
	天平勝宝3年(751)9月20日(類収)	1巻	7紙	12	116	
	天平勝宝5年(753)5月7日	1巻	— 紙	12	444	
	天平勝宝5年(753)5月7日(類収)	1巻	— 紙	12	471	
	天平勝宝7年(755)4月20日	1巻	6紙	25	188	
	天平勝宝7年(755)4月20日	1巻	— 紙	25	191	
	天平勝宝8年(756)7月2日(類収)	1巻	— 紙	13	179	
	天平勝宝8年(756)7月2日(類収)	1巻	— 紙	13	191	
	天平神護3年(767)2月22日(類収)	1巻	— 紙	17	68	
	宝亀2年(771)3月19日	— 巻	— 紙	18	37	
	宝亀2年(771)3月27日	— 巻	— 紙	18	168	
	宝亀3年(772)9月28日	1巻	6紙	20	141	
	宝亀3年(772)9月28日	1巻	6紙	20	190	
	宝亀3年(772)9月1日	1巻	7紙	21	29	
	宝亀3年(772)-月-日(類収)	1巻	7紙	21	92	
	宝亀7年(776)6月7日	— 巻	7紙	23	587	
出生無量門持經	天平8年(736)11月24日	1巻	— 紙	7	60	
	天平勝宝3年(751)9月20日(類収)	1巻	8紙	12	79	
	天平勝宝3年(751)8月16日	1巻	9紙	12	116	
	天平勝宝5年(753)5月7日	1巻	— 紙	12	444	
	天平勝宝7年(755)4月21日	1巻	— 紙	25	188	
	天平神護3年(767)2月22日(類収)	1巻	— 紙	17	68	
	宝亀2年(771)3月19日	— 巻	8紙	18	37	
	宝亀2年(771)3月27日	— 巻	8紙	18	168	
	宝亀3年(772)9月28日	1巻	9紙	20	141	
	宝亀3年(772)9月28日	1巻	9紙	20	190	
	宝亀3年(772)9月1日	1巻	9紙	21	29	
	宝亀3年(772)-月-日(類収)	1巻	7紙	21	92	
	宝亀7年(776)6月7日	— 巻	8紙	23	587	
無量門破魔陀羅尼經	天平8年(736)11月24日	1巻	— 紙	7	60	
	天平9年(737)2月-日	1巻	— 紙	24	50	
	天平9年(737)3月12日	1巻	— 紙	7	69	
	天平9年(737)8月8日	1巻	12紙	7	111	
	天平勝宝3年(751)9月20日(類収)	1巻	11紙	12	79	
	天平勝宝3年(751)9月20日(類収)	1巻	12紙	12	116	
	天平勝宝5年(753)5月7日(類収)	1巻	— 紙	12	494	
	天平勝宝6年(754)2月23日	1巻	— 紙	3	648	
	天平勝宝7年(755)4月20日	1巻	— 紙	25	188	
	宝亀2年(771)3月19日	— 巻	12紙	18	37	
	宝亀2年(771)3月27日	— 巻	12紙	18	169	
	宝亀3年(772)9月28日	1巻	12紙	20	142	
	宝亀3年(772)9月1日	1巻	12紙	21	29	
	宝亀3年(772)(類収)	1巻	7紙	21	92	
	宝亀7年(776)6月7日	— 巻	11紙	23	587	

経典名称	出納もしくは書写後の検収日	巻数	枚数	巻	頁	備考
阿難陀目佉尼呵離陀經	天平 11 年 (739) 7 月 17 日	1 巻	— 紙	7	85	
	天平勝宝 5 年 (753) 5 月 7 日 (類収)	1 巻	10 紙	12	552	
	宝亀 5 年 (774) 10 月 17 日類収	1 巻	— 紙	23	146	
阿難陀目佉尼呵離陀隣尼經	天平 8 年 (736) 11 月 24 日	1 巻	— 紙	7	60	※ 1
	天平 17 年 (745) 11 月 23 日	1 巻	— 紙	24	173	
	天平 20 年 (748) 8 月 4 日	1 巻	— 紙	10	324	
	天平勝宝 3 年 (751) 9 月 20 日 (類収)	1 巻	10 紙	12	79	
	天平勝宝 3 年 (751) 9 月 20 日 (類収)	1 巻	11 紙	12	116	
	天平勝宝 5 年 (753) 5 月 7 日 (類収)	1 巻	— 紙	12	494	
	天平勝宝 7 年 (755) 4 月 20 日	1 巻	— 紙	25	188	
	天平神護 3 年 (767) 2 月 22 日 (類収)	1 巻	— 紙	17	68	※ 1
	宝亀 2 年 (771) 3 月 19 日	— 巻	11 紙	18	37	
	宝亀 2 年 (771) 3 月 27 日	— 巻	11 紙	18	169	
	宝亀 3 年 (772) 9 月 28 日	1 巻	11 紙	20	141	
	宝亀 3 年 (772) 9 月 28 日	1 巻	11 紙	20	190	
	宝亀 3 年 (772) 9 月 1 日	1 巻	11 紙	21	29	
	宝亀 3 年 (772) (類収)	1 巻	7 紙	21	92	
舎利弗陀羅尼經	天平 8 年 (736) 11 月 24 日	1 巻	— 紙	7	60	
	天平勝宝 3 年 (751) 9 月 20 日 (類収)	1 巻	9 紙	12	79	
	天平勝宝 3 年 (751) 9 月 20 日 (類収)	1 巻	10 紙	12	116	
	天平勝宝 5 年 (753) 5 月 7 日 (類収)	1 巻	— 紙	12	494	
	天平勝宝 7 年 (755) 4 月 20 日	1 巻	— 紙	25	188	
	天平神護 3 年 (767) 2 月 8 日 (類収)	1 巻	— 紙	17	30	
	天平神護 3 年 (767) 2 月 22 日 (類収)	1 巻	— 紙	17	68	
	宝亀 2 年 (771) 3 月 19 日	— 巻	9 紙	18	37	
	宝亀 2 年 (771) 3 月 27 日	— 巻	9 紙	18	168	
	宝亀 3 年 (772) 9 月 28 日	1 巻	10 紙	20	141	
	宝亀 3 年 (772) 9 月 28 日	1 巻	10 紙	20	190	
	宝亀 3 年 (772) 9 月 1 日	1 巻	10 紙	21	29	
	宝亀 3 年 (772) (類収)	1 巻	7 紙	21	92	
	宝亀 7 年 (776) 1 月 15 日	1 巻	— 紙	23	582	
	宝亀 7 年 (776) 6 月 7 日	— 巻	9 紙	23	586	
一向出生菩薩經	天平 8 年 (736) 11 月 24 日	1 巻	— 紙	7	60	
	天平 14 年 (742) 7 月 23 日	— 巻	— 紙	24	179	
	天平 20 年 (748) (類収)	— 巻	— 紙	24	545	
	天平勝宝 3 年 (751) 9 月 20 日 (類収)	1 巻	13 紙	12	79	
	天平勝宝 3 年 (751) 9 月 20 日 (類収)	1 巻	14 紙	12	117	
	天平勝宝 5 年 (753) 5 月 7 日 (類収)	1 巻	— 紙	12	471	
	天平勝宝 7 年 (755) 4 月 20 日	1 巻	— 紙	25	188	
	天平勝宝 7 年 (755) 4 月 20 日	1 巻	— 紙	25	191	
	天平勝宝 8 年 (756) 7 月 2 日 (類収)	1 巻	— 紙	13	179	
	天平勝宝 8 年 (756) 7 月 2 日 (類収)	1 巻	— 紙	13	189	
	天平神護 3 年 (767) 2 月 8 日 (類収)	1 巻	— 紙	17	30	
	天平神護 3 年 (767) 2 月 22 日 (類収)	1 巻	— 紙	17	68	
	宝亀 2 年 (771) 3 月 19 日	— 巻	14 紙	18	37	
	宝亀 2 年 (771) 3 月 27 日	— 巻	14 紙	18	168	
	宝亀 3 年 (772) 9 月 28 日	1 巻	15 紙	20	141	
	宝亀 3 年 (772) 9 月 1 日	1 巻	15 紙	21	29	
	宝亀 3 年 (772) (類収)	1 巻	7 紙	21	93	
	宝亀 7 年 (776) 1 月 15 日	1 巻	— 紙	23	582	
	宝亀 7 年 (776) 6 月 7 日	1 巻	14 紙	23	586	

※ 1 はいずれも「阿難陀目佉尼訶經」と表記されるものであるが、記録に現れた頻度を考慮してひとまず「阿難陀目佉尼呵離陀隣尼經」の項目に含めた。

左^ニ、如^レ是^ノ一^ハ左^ニ一^ハ右^ニ次第^ニ置^ケ之^ヲ、今於^ニ此^ノ八菩薩^ノ中^ニ、先^ニ以^テ除^ケ疑怪^ヲ在^ニ除^ケ蓋障^ノ之^右、施^{一切無畏}在^レ左^ニ、次^ニ復^タ以^テ除^ケ一切惡趣^ヲ在^ニ除^ケ疑怪^ノ之^右、以^ニ救^{意慧}在^ニ施^{無畏}之^左、次^ニ復^タ以^テ悲^念菩薩^ヲ在^ニ除^ケ惡趣^ノ之^右、以^ニ慈^起菩薩^ヲ在^ニ救^意慧^ノ之^左、次^ニ復^タ以^テ除^ケ一切熱惱^ヲ在^ニ悲^念之^右、不可思議慧^ハ在^ニ慈^起之^左、諸餘^ノ位布例^モ皆放^レ此^ニ也、

(返り点、送り仮名等論者)

すなわち、八菩薩の配置は中尊の右左に交互に外側へと横一列に配すると説くとともに、「諸餘の位布例(Ⅱ列)も皆此に放^ナ(Ⅱ倣)へ」とする。この記述は『大日經義釈(以下、義釈)』においても全く同文である。⁽⁷³⁾もとより、『大日經』の注釈書であった『疏』・『義

〔表4〕 表3に掲げた諸經が説く「八大菩薩」の名称一覧

不空訳 出生無辺門 陀羅尼經	智嚴訳 出生無辺門 陀羅尼經	支兼訳 無量門微密 持經	仏陀跋陀羅訳 出生無量門 持經	功德直・玄暢訳 無量門破魔 陀羅尼經	求那跋陀羅訳 阿難陀目佉尼 阿離陀經	仏駄扇多訳 阿難陀目佉尼 阿離陀隣尼經	僧伽婆羅訳 舍利弗陀羅尼 經	闍那崛多訳 一向出生菩薩 經
遍照菩薩 照明菩薩 慧光菩薩 日光菩薩 警覺菩薩 滿一切意樂菩薩 星宿王菩薩 行慧菩薩	嚕遮 韓嘑戰 般孃鉢韓 窣耶揭韓 薩低 阿鞞鉢耶鉢本 諾叉怛囉闍 遮唎怛磨	無愛天 悅可天 智光天 懷金天 積習天 願滿天 星王天 行審天	照明十方天子 離欲行天子 慧光天子 如日天子 真諦天子 願滿天子 星王天子 知行天子	衆光菩薩 智光菩薩 日光菩薩 問難菩薩 一切願滿菩薩 大力菩薩 星王菩薩 名意菩薩	照明十方天子 世明天子 智光天子 日光天子 上審天子 滿所願天子 星王天子 習行天子	照明十方天子 世明天子 智光天子 日光天子 上審天子 滿所願天子 星王天子 習行意天子	光明菩薩 慧光明菩薩 日光明菩薩 教化菩薩 令一切意滿菩薩 大自在菩薩 宿王菩薩 行意菩薩	明徹天子 普照天子 智光天子 日光天子 勸請天子 一切願滿足天子 星宿王天子 宝意天子
大正蔵19一六七九a	同七〇七b	同六八二a	同六八四c	同六九一c	同六八八a	同六九五a	同六九八a	同七〇二b

釈』の到来は、空海以降とみなければならぬ。⁽⁷⁴⁾しかし、かつて指摘したように『大日經』そのものについては、玄昉の帰国に際し日本にもたらされており、その請来を機に少なからず書写の対象となっていたことが正倉院文書の記録から窺われる。⁽⁷⁵⁾かつ、この『大日經』の理解には、注釈書の存在は必要不可欠であり、玄昉はもとより宝龜年間(七七〇〜七八二)に入唐した西大寺徳清によっても注釈書である善無畏釈・一行記の『大日經義記(以下、義記)』が『疏』・『義釈』に先駆けて持ち帰られていた。⁽⁷⁶⁾これらのうち、玄昉請来の『義記』の実態については明らかにし難い。⁽⁷⁸⁾しかし、徳清によってもたらされた『義記』は現存し、当該箇所⁽⁷⁹⁾の文言については、上掲の『疏』はもとより『義釈』の当該文言と同一であったようである。⁽⁸⁰⁾とすれば、この三本に先駆けて玄昉がもたらした善無畏

挿図4 鎚鍍鍍金 如意輪観音ならびに八菩薩
(六臂観音盞頂金函 正面) 唐代(9世紀後半)
中国・陝西省扶風 法門寺塔地宮出土

釈・一行記の『義記』においてもその解説は基本的に変わらなかったのではなかろうか。かつ、そこに説かれた当該の八菩薩はもとより「諸餘」尊の配置についても「放^な此^二」へとあり、そこで述べられる「位布例(＝列)」の表記も、「碑并序」において「八大菩薩」を「列坐」したとことと通じるものがある。菩提遷那が「列坐」を構想していた「八大菩薩」の配置にあたって、『義記』に説かれるところの「八菩薩」の配置法が「諸餘ノ位布例^モ皆放^レ此^二」とあることと相まって参酌されていた可能性をここに指摘してみたのである。もとより『出生無辺門陀羅尼經』をはじめとする上掲の諸經に説かれる「八大菩薩」は、諸經において衆生救済という願

意を同じくしながらも、尊名を異にしており(表4)、かつ、そのいずれにおいても具体的な尊容には言及がない。そのことを思えば造頭にあたって「八大菩薩」は、いずれも施無畏・与願印、あるいは、恭敬・合掌といった通仏相の表現での造立であったように考えるのである。そうとみると、降って九世紀後半の事例ではあるが、中国・陝西省扶風法門寺塔地宮出土の釈迦の真身舍利を何重にも納めた容器のひとつ鎚鍍鍍金「六臂観音盞頂金函」において如意輪観音とともにあらわされた八菩薩(挿図4)の様態は、まさしく八尊の菩薩が通仏相をもって如意輪観音に併置する事例として参考になるであろう。⁽⁸⁾

三 八世紀における六臂・思惟形 如意輪観音像の実相

菩提遷那が造立した「如意輪菩薩像」の造像時期は、天平八年(七三六)に詔勅をもって大安寺に止住して以降、天平宝字四年(七六〇)の入滅までの間であった。その姿かたちは金剛智訳『観自在如意輪菩薩瑜伽要』の所説に則った六臂・思惟形であり、平安時代以降、真言・天台を問わず「新密教」において尊崇対象の一翼を担う如意輪観音の先蹤をなすものであった。しかしながら、菩提遷那の造像の目的とするところは、六手それぞれに六道救済の役割をもたせるとともに、欣求浄土の思想と結びついたものであり、密教性は希薄であったといわざるを得ない。そのような如意

輪観音の造像は、わが国では菩提遷那の造像をもって嚆矢とするが、ここで改めて想起されるのは、唐・長安において開元二十四年（七三六）に亡き大智禪師（義福）の行実顕彰を行うべく造立をみた大智禪師碑の碑首の頂に高肉彫りをもってあらわされた六臂・思惟形のそれにある。かの禪師が金剛智に師礼をもつて接していたことを思えば、顕彰碑にわざわざ六臂・思惟形の如意輪観音像をあらわし得たことも、そこに金剛智訳に述べるところの如意輪観音の六臂による六道救済思想の反映があり、その顕彰に少なからず追善菩提の意味合いを持たしめた所以であったと考えるのである。それはまさしく菩提遷那の「如意輪菩薩」造像のありようと軌を一にしており、八世紀の密教黎明期における六臂・思惟形の「如意輪菩薩」造像の目的が中・日の別なく何処にあったかを示唆するのに十分である。もとより菩提遷那の「如意輪菩薩像」の両脇に併置された「八大菩薩像」の役割についても、欲界に迷う衆生の救済を目的

挿図5-1(1) 如意輪観音像 奈良時代(8世紀後半) 奈良・法隆寺

とする造像であり、想定された依拠經典類がいずれも陀羅尼の効能を説くものであったことを思えば、尊前での陀羅尼念誦を特色としたわが国当代の、いわゆる古密教のありようから逸脱するものではないことも明らかである。すなわちそれは「新密教」の経軌にもとづいての視覚的に目新しい姿かたちを採用しながらも、信仰のありようは「八大菩薩像」ともども、尊前での陀羅尼の詠唱を特色とする古密教の範疇から逸脱するものではなく、そのありようはまさしく「古密教」から「新密教」の経軌への移行期の密教造像の動向を端的に示すものといえよう。⁽⁸²⁾

そうとみると、ここに至って一言しておきたいのは、法隆寺に伝来した如意輪観音像（以下、法隆寺像）の存在にある（挿図5）。石田尚豊氏による八世紀における如意輪観音の受容についての指摘（既述）を承けて、これまで制作年代は遡っても八世紀末頃とされてきたようであるが、六臂・思惟形の如意輪観音の唐・長安

挿図5-1(2) 同（頭部左斜側面）

挿図6 十一面観音像（頭部左斜側面）
奈良時代（8世紀後半） 大阪・道明寺

挿図7 観音菩薩立像(部分)
奈良時代(8世紀後半)
奈良・法隆寺

における顕現は開元二十四年(七三六)に遡るものであり、菩提遷那の六臂・思惟形の「如意輪菩薩像」の造顕もひとまず大安寺止住した天平八年(七三六)以降、入滅の天平宝字四年(七六〇)までの間であったことを思うとき、もはや、法隆寺像の制作年代について、これまでのように八世紀末に上限を設定する必要はないであろう。その造形には類作が求め難いが、白毫をあらわさない鼻筋の通った容貌は大阪・道明寺十一面観音像(挿図6)からの展開上にあるようであり、胸飾に見る垂飾を伴わない半円弧状の基本帯の中央にあらわした菊座とともにそれら全体をやや肉厚につくる形式についても、法隆寺九面観音像や静岡・MOA美術館観音菩薩像、道明寺十一面観音像などに認められる胸飾の半円弧状基本帯の上辺に独立してあらわされた連珠(珠繋ぎ)を消失させての展開であったとみることもできるであろう。あわせて、胸飾における菊座をともなう半円弧状の基本帯のみで、その下端に垂飾をあらわさない形制は、八世紀後半に遡る法隆寺観音菩薩像(挿図7)、京都・光明寺

千手観音像、奈良・金剛山寺十一面観音像、兵庫・大龍寺菩薩像、愛媛・庄薬師堂菩薩像などへとそれぞれ継承され展開するようである。かの法隆寺像は、用材(樹種)の選択において白檀とみるか桜材とみるかで、その造像が中・日いずれに帰し得るかは作風の微妙であるが、むしろ、その微妙さこそ八世紀半ばからややこれを降った頃の、中国から日本に及ぶ東アジア域において受容をみた当代如意輪観音像の作風の一端を示して、まさしく天竺・唐を経て来日した菩提遷那⁽⁸⁵⁾が造立した如意輪観音像の面影をこの法隆寺像の作風のうちに求めてみるのも一案と考えるのである。

註

- (1) 基本史料『南天竺婆羅門僧正碑并序』では「支識の英範を追ひ、世高の逸軌を逐ひ、雪峰を跨ぎて影を進め、雲海に泛(うか)びて儀(かたち)を飛ばし、險しきを冒し遠きを経(へ)、遂に大唐に到る」とのみ述べる(原文読み下し)。なお、読み下しは後掲註42の藏中しのぶ編『南天竺婆羅門僧正并序』注釈にしがた(以下も同じ)。
- (2) 『冊符元龜』巻九七一に収める開元二十二年条には「四月、日本国遣使来朝、獻美濃糸二百匹、水織糸二百疋」と記録されている。
- (3) 『南天竺婆羅門僧正碑并序』では「唐国の道俗、其の徽猷を仰ぎ、崇敬(あが)むること甚だ厚し」と述べる。
- (4) 『南天竺婆羅門僧正碑并序』では「使人(つかひ)の丹治比真人広成・学問の僧理鏡、其の芳誉を仰ぎて東帰を要請す」と述べる。
- (5) ちなみに、第一船団は天平六年(七三四)十一月に種子島(「多欄嶋」)に漂着し、翌年三月に大使丹治比真人広成は朝廷に正使の象徴である節刀を返上している(『続日本紀』天平六年十一月条、同七年三月条)。

(6) 『続日本紀』天平八年八月条。

(7) 当該史料のほか関係史料については、堀池春峰「菩提僧正関係資料集」(『靈山寺と菩提僧正記念論集』靈山寺、一九八八年、一一一―一三一頁)に大半が網羅されている。また、これに漏れた史料について、田島公「婆羅門僧正(菩提遷那)の剣―仁和寺円堂院旧蔵「杖剣」相伝の由来―」『日本古代の詩的展開』蘭田香融編、塙書房、四五七―四七六頁)に言及がある。なお、『古代における南西アジア文化とヤマト文化の交流に関する調査・研究(総集編)―南天竺婆羅門僧正菩提遷那をめぐる―』(二〇一三年度 早稲田大学奈良県連携事業成果報告書) 研究代表者 新川登亀男(『早稲田大学美術史学研究室・奈良県立美術館、二〇一四年)にも史料についての言及がなされているようであるが入手に至らず未見である。

(8) 後代の事例ではあるが、註49の谷口耕生後掲論文に言及があるように、フランス・ギメ美術館所蔵の太平興国六年(九八二)の年紀がともなう千手千眼観音図にあらわれた六臂・思惟形の如意輪観音の傍に付された札銘に「如意輪菩薩」と記されていたことも参考となろう。

(9) ちなみに、正倉院文書には他に「如意輪」の語彙を題名に有する經典として、『観世音如意輪含藥品』と『観世音秘密無障礙如意輪陀羅尼藏義經』の存在が知られる(『大日本古文書』編年文書 卷三一―四七頁、卷九―四四八頁、六一一頁、卷十二―一四六頁、四二二頁、四一四頁、四七頁、卷二四―五七頁、三三八頁、五三七頁)。前者は「一卷四紙」とあることから(卷十二―四一二頁、四一四頁)、『観世音秘密藏如意輪陀羅尼神呪經』のなかの「観世音如意輪含藥品第四」(『大正新脩大藏經』20―一九八c―一九九)を独立・増補させたもののようである。後者は「一(卷)五(紙)」(卷二四―三三八頁)とあるところから、前者よりも文字量がさらに一紙分、多かったようであるが、散逸經典のようであり、詳細は不明。

(10) 『大正新脩大藏經』20―二〇三b、二〇八c、二二三b、二二七a、二七一a、二八八b。

菩提遷那の「如意輪菩薩像」再考

(11) 『大正新脩大藏經』20―一九三b。

(12) 『大正新脩大藏經』55―六六九b。

(13) 『大正新脩大藏經』55―七〇七c。

(14) 『大正新脩大藏經』20―一八八b。

(15) なお、①②③の訳出者とされる菩提流志(生没年不詳)について、その名で知られる人物としては六世紀前半の北魏・洛陽で活動した訳経僧 菩提流支が著名であるが、①③では、いずれも訳出者に「大唐」もしくは「唐」を冠しており、もとより北魏の訳経僧とは一字違いの別人である。ここで言うところの菩提流志は、『開元録』の編者であった智昇が撰述した『続古今訳経図紀』に「沙門菩提流志」として伝記が収録される訳経僧である。その活動期は七世紀後半から八世紀初めにかけてであり、その伝記中には「不空罽索神變真言經一部三十卷」と「如意輪陀羅尼經一卷」の漢訳について明記されている(『大正新脩大藏經』五五―三七一c)。

(16) 『大正新脩大藏經』の当該経の脚注には「東寺三密藏古寫本」と記すが、本文の末尾に「金剛仏師興然本」を明記し、興然(一一二〇―一二〇三)の手沢(『所持』本をもとにすることが知られる。ただし、「古寫本」が興然手沢本そのものであったかどうかは不明(『同』20―二〇二c、二〇三c)。

(17) 長部和雄『唐代密教史叢考』漢水社、一九九〇年(五三頁)。

(18) 『大正新脩大藏經』56―六六九c。

(19) 『大正新脩大藏經』56―七一b。この項目は『開元釈教録』卷十九に収められた西崇福寺の一切経目録の記載である。

(20) 『大正新脩大藏經』55―五七一c。

(21) 『大正新脩大藏經』55―五七一b。

(22) 『大正新脩大藏經』55―八七五a。

(23) 註17の長部和雄前掲書(四六―四七頁)。

(24) 『大正新脩大藏經』55―七〇〇b。

(25) 『大正新脩大藏經』52―八三九a、c。

- (26) 『大正新脩大藏經』55—七七七c。
- (27) すなわち、「繳右」「車輅」「蟠於」の三つの語彙を挙げている(『大正新脩大藏經』54—五六八b)。
- (28) このうち「車輅」については、不空訳『觀自在菩薩如意輪念誦儀軌』の本文中、六か所に認めることができる(『大正新脩大藏經』20—二〇五a、b、二〇六b)。また、「蟠於」については一か所において見出せる(『同』20—二〇六b)。なお、「繳右」については見出し難いが、これは『慧琳音義』の当該語彙を翻刻した際の活字「繳」自体に問題があるかもしれない。唐本もしくは宋版に拠って当該文字の確認をする必要があり、この語彙については、ひとまず保留にしておきたい。
- (29) 『大正新脩大藏經』55—一〇三五b。
- (30) 『大正新脩大藏經』55—七五四a。
- (31) 註17の長部和雄前掲書(四八頁)では、金剛智訳『觀自在如意輪菩薩瑜伽法要』と不空訳『觀自在菩薩如意輪瑜伽』の関係について「金剛智訳は不空訳を再治したものであり」「同本異訳ではないと思う」とされたが、本文中で述べたように金剛智による当該儀軌の漢訳が開元十八年(七三〇)であり、不空訳は大暦六年(七七二)以降、不空の最晩年(七七四年没)のことであったとみなされるところから、その説は成り立たない。やはり「同本異訳」とみるべきではなからうか。
- (32) 『大正新脩大藏經』20—二一五脚註。
- (33) 石田尚豊『曼荼羅の研究』研究篇、東京美術、一九七五年(四三頁下段)。
- (34) 註33の石田尚豊前掲書(四四頁上段)。
- (35) 論者がその存在を知ったのは、一九九三年八月、サバティカル中の師・紺野敏文先生が、上海から西安に居所を移されたのを機に、訪中した際、碑林において同行の同門学兄である山岸公基氏(現、奈良教育大学教授)よりご教示いただいた。
- (36) 『大正新脩大藏經』50—七一一b。
- (37) 『続日本紀』天平十八年(七四六)六月条(玄昉卒去の記事)には「靈龜二年入唐^{シテ}學問^ス、唐ノ天子尊^レヒテ^テ 昉^ヲ准^ニ三品^ニ令^レ着^セ紫袈裟^ヲ、天平七年隨^テ大使多治比^ノ真人広成^ニ還歸^ス、實^ニ經論五千餘卷及^ヒ諸佛像^ヲ來^{レリ}」と記す(文言は『増補新訂 国史大系 続日本紀 前編』吉川弘文館、一九八七年版に拠る、一八八頁)。
- (38) 皆川完一「光明皇后願經五月一日經の書写について」『日本古代史論集』上、坂本太郎博士還暦記念会編、吉川弘文館、一九六二年。太平聡「留学生・僧による典籍・仏書の日本将来—吉備真備・玄昉・審祥—」『専修大学社会地勢開発研究センター東アジア世界史研究センター年報』二号古代東アジア世界と日本・新羅の留学生、二〇〇九年。
- (39) 『大正新脩大藏經』55—六八五b、六八八a。
- (40) 『八家秘録』に拠ると、当該儀軌の請来は空海とともに、円仁、円珍、恵運、宗叡がもたらしたことを伝えている(『大正新脩大藏經』55—一一二三b)。
- 如意輪念誦法一卷 不空訳 貞元新入目錄 海 開覺 列外題 也、又加本云、如意輪菩薩念誦法
- 觀自在菩薩如意輪念誦法儀軌一卷 不空訳 仁、運、珍、私云恐是原本
- (41) 「碑并序」の原文を示しておく以下の通りである。
神護景雲四年四月二十一日
故婆羅門僧正入室弟子傳燈住位僧修榮
- (42) 中世に遡る写本は知られないようである。小論では藏中しのぶ編、赤塚史、朱一飛、土佐朋子、松山匡和、山口卓也、李満江「『南天竺婆羅門僧正碑并序』注釈」『水門—言葉と歴史—』二二号(勉誠出版、二〇〇九年)に拠った。この「注釈」では、東大寺図書館蔵の元禄十一年(一六九八)京都二条通松原町武村市兵衛開版本を底本とするとともに、現在知られる諸本すべてをもつて本文を詳細に校訂する。あわせて校勘・訓読・現代語訳・語釈が詳細に付されている。
- (43) 註42の藏中しのぶ編前掲「『南天竺婆羅門僧正碑并序』注釈」。
- (44) 藏中しのぶ「『南天竺婆羅門僧正碑并序』と高僧伝—仏教漢文伝の文学史的意義—」『水門—言葉と歴史—』一五号、水門の会、一九八六

年。同「玄奘三藏伝と『南天竺婆羅門僧正碑并序』——祇園精舎、長安西明寺・大安寺創建説話の背景——」『説話論集（第五集） 仏教と説話』説話と説話文学の会編、一九九六年。同「『南天竺婆羅門僧正碑并序』の構成——序」と「賛」の対応から——『アジア遊学』四、勉誠出版、二〇〇三年。

(45) 註42の藏中しのぶ編前掲「『南天竺婆羅門僧正碑并序』注釈」。

(46) 註44の藏中しのぶ「『南天竺婆羅門僧正碑并序』と高僧伝——仏教漢文伝の文学史的意義——」では、性空編『南天竺婆羅門僧正碑註（以下、碑註）』に引くところの「探玄記解」に類似の文章表現があるとされたが、法藏述『華嚴經探玄記』に拠って確認してみると、当該箇所は直前の「名觀自在」までであり（『大正新脩大藏經』35—四七一c）、それ以降の文は性空その人の自問自答とみた方がよさそうである。したがって、この箇所を含めて「碑并序」の造像について述べた一文には似寄りの文章に拠ることなく、菩提遷那の造像事績を率直に記したものとみなされる。なお、性空編『南天竺婆羅門僧正碑註』の本文は、鈴木学術財団本『大日本仏教全書』七二巻・史伝部十一、一九七二年（六五頁下段）に拠った。

(47) 井上一稔「奈良時代の「如意輪」観音信仰とその造像——石山寺像を中心に——」『美術研究』三三三号、東京国立文化財研究所（のちの国立文化財機構 東京文化財研究所）、一九九二年。

(48) 註46の性空編『碑註』参照。

(49) 谷口耕生「菩提遷那と古密教の美術」『正倉院宝物に学ぶ』奈良国立博物館編、二〇〇八年、一二六—二四五頁。

(50) 註47の井上一稔前掲論文。

(51) ここではいうところのカギ括弧付きの「新密教」「古密教」の別は、石田茂作『写経より見たる奈良朝仏教の研究（東洋文庫論叢 第十一）』（東洋文庫、一九六六年再版、一四六—一五九頁。初版は一九三〇年）に拠る。石田氏の指摘にしたがうと「新密教」の經典の特徴は、そこに説かれる諸尊が組織的で、かつ曼荼羅を有する点にあるといい、そ

のなかに「純密」において重視された金剛智、善無畏、不空、一行などの手になる訳経が含まれることはいうまでもない。一方、彼ら以前の訳経にはそのことへの意識が希薄であり、これを「古密教」の經典と位置付けて「新密教」の經典と二線を画している。

(52) 『大正新脩大藏經』9—七八六b。

(53) 『大正新脩大藏經』10—四四三a。

(54) すなわち『四十華嚴』では「引導其前、一刹那中即得往生極樂世界、到已即見阿弥陀仏」あり、続いて「於一念中、所有行願、皆得成就、所獲福聚無量無辺、能於煩惱大苦海中、拔濟衆生、令其出離。皆得往生阿弥陀仏極樂世界」と説かれている（『大正新脩大藏經』10—八四六c）。

(55) 例えば『四十華嚴』の漢訳に先行する華嚴經系の阿弥陀信仰の經典というとき、想起されるのは仏陀跋陀羅訳『文殊師利発願經』に「願我命終時、除滅諸障礙、面見阿彌陀 往生安樂國、生彼佛國已、成滿諸大願」と説かれることにある（『大正新脩大藏經』10—八七九c）。同經は開元十八年（七三〇）に編まれた『開元録』に登載が確認できるとともに（『大正新脩大藏經』55—六二三b、六六八b、六九七a、七二一c）、その訳出は元熙二年（四二〇）以前に遡ることが伝えられている（『同』55—五〇五c）。また、正倉院文書に記録された写経所における同經の出納記録のなかに僅かであるが存在する。すなわち、正倉院文書『続々修』十四帙四に収められた天平勝宝四年（七五二）正月二十五日類収の「可請本紙經目錄」（『大日本古文書』編年文書卷十二—二一五頁）と『同』十二帙四に収められた同五年五月七日類収の「未写經論律集目錄」のなかにその名を認めることができる。菩提遷那の『華嚴經』系の阿弥陀信仰の依拠經典候補の第一として視野に入れておきたい。

(56) 藏中しのぶ「『南天竺婆羅門僧正碑并序』の沈黙——菩提遷那の「阿弥陀浄土」と光明皇太后追善事業——」（『文学・語学』二一八号、全国大学国語国文学会、二〇一七年）では、菩提遷那が弟子たちに求めた

「阿弥陀浄土」は画像であった可能性を想定する。ただし、弟子たちが菩提遷那の要請に応じたかどうかについては「碑并序」に触れるところがないことから、実際は造像に至らなかったと指摘している。というのも、天平宝字四年二月の菩提遷那の没後もない同年六月の光明皇后遷化にともない、平城京において皇后の追善（四十九日の齋会）のための国家事業として各国分寺において「阿弥陀浄土画像」の造像と『称讃浄土経』の書写が行われ（『続日本紀』天平宝字四年七月二十六日条）、翌年六月七日条には、この日、法華寺の西南隅における「阿弥陀浄土院」で皇后の一周忌齋会が執り行われるとともに、諸国の国分尼寺において阿弥陀丈六像一軀、挟脇侍菩薩像二軀の造像が行われたため（『同』天平宝字五年六月七日条）、官寺であった大安寺において、時節柄、菩提遷那の私的な「阿弥陀浄土」の造詣を行うこと自体、弟子たちが遠慮して「制作することはなかったのであろう」とされている。

(57) 『大正新脩大蔵経』20—二〇九a。当該句の大本は智顗（五三八—五九七）の『法華三昧懺儀』の「普為四恩三有及法界衆生、悉願断除三障帰命懺悔」という句（『大正新脩大蔵経』46—九五二a）に求められそうである。

(58) 註42の藏中しのお編前掲「南天竺婆羅門僧正碑并序」注釈では、四恩の語釈として「父母」「衆生」「国王」とともに「三宝（仏法僧）」とする解釈（唐・般若訳『大乘本生心地観経』／『大正新脩大蔵経』3—一五九a）と、「施主」とする解釈（宋・道誠集『釈氏要覧』巻中／『同』54—二八九c）の二系統があったことを提示している。ただし、語釈としては参照できるが、正倉院文書にあつて後者はもとより前者についても、その漢訳者の活動時期（八世紀末）と相まって、その名称が記録に見えないことは留意する必要がある。

(59) 『大正新脩大蔵経』47—四五七a。その成立年については『開元録』巻九への登載に際し言及がなされている（『大正新脩大蔵経』55—五七二b）。

(60) 智昇が『開元録』を開元十八年（七三〇）に編纂する折に、自ら撰集した『集諸経禮懺儀』二巻も、註59で触れた巻九のほか、巻十三、さらに玄昉が一切経五千余巻を唐土において収集する際に準拠した巻二〇（西崇福寺の一切経目録）にも、その名を留めている（『大正新脩大蔵経』55—六九七c、七二二c）。

(61) すなわち、正倉院文書の「続修別集二十七」に収められた天平十九年（七四七）六月九日付「写疏所解」の中にその名がみえる（『大日本古文書』編年文書巻九—三九四頁）。ほかに「続々修十四帙四」の天平勝宝四年（七五二）正月二十五日に類収された「可請本経目録」（『同』巻十二—二一六頁）、「続々修十三帙四」同五年五月七日類収の「未写経律論集目録」（『同』巻十二—五六三頁）にも記載が認められる。

(62) 『大正新脩大蔵経』20—一九三c。

(63) 註46の鈴木學術財団本『大日本仏教全書』七二巻（六六頁中段）、註49の谷口耕生前掲論文。

(64) 「八大菩薩」解説『密教大辞典』法蔵館、二〇一三年縮刷版第十一刷（一八二頁）。

(65) いずれも『大正新脩大蔵経』19所収（No.1009、1010—1018）。なお、この「八大菩薩」について「阿弥陀浄土」と関わって一言しておく必要があるのは、東晋・帛尸梨密多羅訳『灌頂拔除過罪生死得度経』巻十二に、「順欲往生西方阿弥陀仏国者」は、昼夜を分かたず薬師如来の本願功德を憶念するならば、命終の折、文殊師利、観世音、得大勢至、無尽意、宝壇華、薬王、薬上、弥勒の「八菩薩」が死者の魂魄を「皆当飛往迎」と説くことにある（『大正新脩大蔵経』21—五三三c）。この經典は『開元録』巻五に確認でき（『同』55—五三一c）、正倉院文書の写経所における經典の出納と書写のちの検収記録にもしばしば『灌頂経』の名のもと十二巻一具でその存在が相当数確認できる。ただし、その祈念の対象尊は薬師如来であることや、八菩薩に観音とともに勢至が含まれており、先に確認したように菩提遷那の信仰が「尊重弥陀、景仰観音」であったことや、如意輪観音を中尊としてこれに併

置する八大菩薩のうちに「観世音」が重複し、さらに勢至まで登場することは、菩提遷那の欣求浄土思想としてはいささかそぐわないであろう。

(66) 『大正新脩大藏經』 19—六七八c。

(67) 『大正新脩大藏經』 19—六七八a。

(68) 婆藪槃豆造・真諦訳『阿毘達磨俱舍釈論』卷六「釈論中分別世間品第三」には「偈曰、地獄・鬼・畜生・人道及六天、名欲界」(『大正新脩大藏經』 29—一九八a)とあり、世親造・玄奘訳『阿毘達磨俱舍論』卷八「分別世界品第三之一」には「頌曰、地獄・傍生・鬼・人及六欲天、名欲界」(『大正新脩大藏經』 29—四〇c)と記されている。

(69) 『大正新脩大藏經』 19—六八〇a。

(70) 空海撰「御請來目錄」(『大正新脩大藏經』 55—一〇六二b)、『根本大和尚真跡策子等目錄』(『同』 55—一〇六八a)。

(71) 『大正新脩大藏經』 18—八b。

(72) 『大正新脩大藏經』 39—六三五b。

(73) 『義釈』卷第四・入曼荼羅具緣真言品第二之二(『統天台宗全書 密教 I 大日經義釈』一四八頁下段)。

(74) 『八家秘録』に拠ってみると、以下のように記されている(『大正新脩大藏經』 55—一一一四c—一一一五a)。

胎藏界部第二

本經義釈一

大毘盧遮那成佛神變加持經 又云 大毘盧遮那成佛神變 貞元梵 觀月輪圓覺無注、私曰此一前出

大毘盧遮那經義記 十卷 無畏釈一行記 山階玄助僧正

大毘盧遮那經義記 七卷 上下十四卷 西大德清大德

大毘盧遮那經義記 七卷 上下十四卷 叡山本師治定

大毘盧遮那經疏 十四卷 高野海潮僧正

大毘盧遮那經疏 二十卷 海潮僧正治定

大毘盧遮那經義釈 十四卷 有溫古序、叡 山慈覺大師

大毘盧遮那經義釈 十四卷 有溫古序、入唐遍明和上送 來 同前和上本 異仁和上本

菩提遷那の「如意輪菩薩像」再考

大毘盧遮那經義釈 十卷 叡山山王和上、私 云上八同疏異本

大毘盧遮那經序 一卷 行脇藏相承云金剛手持多、而此 序云北天竺山腹爲風吹落故人多疑

大毘盧遮那經義釈序 一卷 溫古 珍

大毘盧遮那經供養法疏 二卷 不可思議藏釈行、仁和寺本云、三藏於烏底那國作 此供養法、而此疏云、空中示現、金色身故、人多疑

大毘盧遮那成佛神變加持經義釈目錄 一卷 珍和上送、中州五本、謂防七、山 七、海二十、仁十四、珍七、叡

大毘盧遮那經略義 二卷 中下、 仁叡

略釈毘盧遮那經中義 一卷 仁叡

大毘盧遮那胎藏經略解眞言要義 一卷 仁叡

大毘盧遮那經疏文次第二卷 海和上集

大毘盧遮那經義記 一卷 海 金剛頂三摩地 儀軌之首妄題此名

祕密記 一卷 海和上集

祕密記 一卷 有人集

(75) 津田徹英「奈良時代の密教造像における明王の出現―奈良・大安寺 嘶堂 伝馬頭觀音立像の意義―」『パラゴネ』一〇号、青山学院大学 比較芸術学会、二〇二三年。

(76) 清水明澄『『大日經』の注釈書の書誌学的研究』『密教文化』二一九号、 密教研究会、二〇〇七年。

(77) 註76の清水明澄前掲論文。

(78) 『八家秘録』の記載(註74参照)にしたがえば、善無畏釈・一行記『大 毘盧遮那經義記』十卷の請來であったことが知られる(『大正新脩大藏 經』 55—一一一四c)。

(79) 『八家秘録』の記載(註74参照)では、当該の『大毘盧遮那經義記』 は七巻構成でそれぞれ上・下巻に分かれ全体で十四巻であったことが 知られる(『大正新脩大藏經』 55—一一一四c)。ちなみに、現存の写 本には、京都・青蓮院吉水藏聖教に平安末期の七巻十四軸(第九箱1、 第十箱1、現状、第三上・四上、第五上下の四軸を欠)があり、註73 の『義釈』の本文翻刻に際して、対校本として用いられている。なお、 吉水藏聖教の登録上の名称は「大毘盧遮那經義釈」を採用しているが、 卷一下の尾題と卷二上の内題・下の尾題には「義記」を明記している。

なお、吉水藏本の卷二上、卷二下、卷四下の各尾題下には「比叡止観院一切経本、莫出院外」と記されている。そのことを思えば、それらは円珍の「大毘盧遮那成道経義积目錄縁起」や円珍請来の十卷本『義积』卷十の奥書（批記）が伝えるところの最澄が借覧したという西大寺徳清請来本の系統に連なる写本であつたとみなされよう。

- (80) 徳清請来本『義記』の現存写本として知られる青蓮院吉水藏本は、現状、卷二下の巻頭から大半を欠失する。『疏』ならびに『義积』の文言を手がかりにするならば、当該箇所もこの欠失部に含まれていたものとみなされる。ただし、卷二上（完本）の全文と卷二下の残存分を『疏』ならびに『義积』の相当箇所と字句の異同を逐一確認してみると、大きく文章を違えるような相違は認め難い。そのことから類推すると、欠失部に含まれていた当該箇所についても、字句に一、二文字程度の異同はあつたとしても、その内容を大きく異にするようなことはなかつたものと考ええる。

- (81) なお、この法門寺塔地宮出土の「六臂観音蓋頂金函」では、如意輪観音を取り囲むように八尊の菩薩が配されている。そのことを思うと、本文中で述べたように八大菩薩による欲界天の迷える衆生救済に言及のある不空訳『出生無辺門陀羅尼経』を承けて供養法を偈文で説いた同訳『出生無辺門陀羅尼儀軌』に述べるところの「復有八菩薩、安住於八方」（『大正新脩大藏経』19—1680a）がその布置に反映されていたとみることも可能であろう。かつ、不空の晩年において金剛智訳『観自在如意輪菩薩瑜伽法要』とほぼ同内容の『観自在菩薩如意輪瑜伽』の漢訳を完了させており、その文中において六臂持物についての解説に続いて六臂による六道の救済を同一の偈文で説くところから、この鍔鍔鍔鍔の如意輪観音像の場合、その表出に関しては必ずしも金剛智訳に限定する必要はなく、むしろ、『出生無辺門陀羅尼経』『出生無辺門陀羅尼儀軌』とともに不空訳のそれに依拠しての造頭であつたとみた方が自然かもしれない。

- (82) 堀池春峰「奈良時代仏教の密教的性格」『西田先生頌寿記念 日本古代

史論叢』吉川弘文館、一九六〇年（のち同『南都仏教史の研究』下巻、法蔵館、一九八二年（四〇三頁—四一九頁）。

- (83) なお、平安時代以降にあつても、このような六道拔苦と追善を目的とした如意輪観音造像が真言密教寺院において行われていたことの一端は、醍醐寺僧元杲（九一四—九五五）の『延命院前大僧都遺訓』「一、追福作善事」に述べられる「始從一七日、至于一周閏、逆修諷誦聊修先了、更不可後行之、但一兩弟子必有所念歟、仍奉圖繪阿彌陀佛像一軀、法利因語四大菩薩、如意輪菩薩、及地藏寶蓮龍樹等菩薩像各一體（中略）即奉礼拝誦誦日夜之勤不怠、須當於七々日奉供養」という記述のうちに窺うことができる。この『遺訓』は未翻刻史料のため、本文は東寺観智院金剛藏聖教第一八二箱四九号（粘葉装、南北朝時代写）に拠った。

- (84) 井上一稔『如意輪観音像・馬頭観音像（日本の美術312）』至文堂、一九九二年（二三頁）

- (85) この天竺・唐を経て来日した菩提遷那の意義を文化史的観点から論じたものに、小島裕子「大仏を開眼した菩提遷那（ボーディセーナ）——日本文化の中に構築された「印度」——」（『鶴見大学仏教文化研究所紀要』二四号、二〇一九年）がある。

【付記】

本論をなすにあたり不躱なお願ひにもかかわらず、藏中のしるぶ氏には、入手困難であつた註44の前掲論文収載の学術誌『水門』一五号を御恵与いただいた。また、挿図1については龍華寺御住職 和田弘雅師のご理解とご了解のもと、県立金沢文庫より、挿図3(1)については横浜美術大学教授 濱田瑞美氏より、同(2)については大阪大学教授 藤岡穰氏より、それぞれご提供をいただいた。ここに記して謝意をあらわす次第であります。